

かきい
笠井

かおる
馨

宇部市
(1917～1961)



【著作】

詩集『赤い聖体ランプ』（昭和37・こだま詩社）

『全国結核療養者詩集』（昭和三十四年（一九五九）刊）にも掲載され、白衣の詩人として

県内でも特異な存在であった笠井馨は、宇部市居能町の出身。その風貌がどこか芥川竜之介に似ていて、若い学生時代はよく京都の撮影所から時代劇のロケーションのとき、エキストラに声がかかって、結構小遣い銭をかせぎだしていたという。

卒業してしばらくは会社勤めをし、青春を楽しんだが、昭和十五年（一九四〇）咯血、戦時中の医療の不十分な中を療養所や病院を転々とした。

宇部市東岐波の山陽荘に移ってからは、院内の詩のグループ誌『潮騒』に作品を発表、その感性豊かな詩はひとときわ光っていた。

また、記憶力抜群で、「わが家の書棚のどこに何という本がある、持ってきてくれ」と、弟の壮坪さんに頼んでいたという。

カトリックに入信していたのはいつごろからか分からないが、詩の主題にも祈りの気持ちが生じている。詩と宗教が二十一年余の彼の闘病生活を支えていたといってもよい。

遺著、詩集『赤い聖体ランプ』は、当時、宇部市にあった「こだま」詩社の主宰・赤木正夫を中心に和田健・林進らの協力で出版された。

（文・和田 健）



笠井馨からの年賀状

詩集
赤い聖体ランプ
笠井 馨



仰臥抄

漂ってくる
ほのかな
クレゾール
尿器のにおい
静かな
手鏡の中の
雨
白い花
薄っぺらな
傾斜した胸にのせた
アルミニュームの
食器と箸箱
木が鳴って
朝ご飯です――
きょうも
ぱらぱらと
ご飯が箸の間から
顔の上に
落ちる

”神様の“ 白い
涙のように

僕ところがつている

肩の

ご飯粒には

淋しい髪の毛などが

ひつついて――

深夜

乾いた傷口の痕の

貝殻骨に突き刺さる

一粒の

飯の刺

詩集『赤い聖体ランプ』
（こだま詩社）より

笠井 馨 年譜

（提供・和田 健）

大正6（一九一七）年	
昭和13（一九三八）年	二二歳
昭和23（一九四八）年	三二歳
昭和34（一九五九）年	四二歳
昭和36（一九六一）年	四四歳
《没後》 昭和37（一九六二）年	10月15日、宇部市「こだま」詩社から詩集『赤い聖体ランプ』が刊行される。
	7月21日、山口県厚狭郡藤山村（現・宇部市）で父笠井秀助、母マツエの長男として生まれる。
	3月彦根高等商業学校（現滋賀大学）卒業。4月、叔母の主人の経営する日本発動機油（株）に入社。後、発病（結核）。別府のカトリック系の「光の園」療養所に長期入院。
	12月、宇部市東岐波、国立山陽荘に入院。山陽荘詩話会で活躍。「こだま」詩社のメンバーとも交流する。
	10月1日発行の全国結核療養者詩集『川を海へ』に詩「仰臥抄」が登載される。
	10月26日、山陽荘で死去。

兄のことなど（抜粋）

笠井壮坪

高商を出ましてから、本は良く読んでいたように思います。病気になるってからは、一層その速度が増してまいりました。反面非常に本を大事にして、病院から石炭箱何杯家に持って帰ったかわかりません。そして、いちいちその本の書棚に入れる位置まで指定するので、後からこれこれの本がどこに並べてあるはずだから持ってくるようにと、実際に整理した自分よりは、その位置をよく知っているのには驚きました。いづぞや病院から持って帰った本を、指定の所に入れないで、適当な所につっこんでいたところ、持ってこいのご命令が出て、それが運の悪いことには英文の本であったり、探すのに困り抜いた苦しい経験があり、それ以後はいつも命令通り、指定の場所に入れるように心がけました。また本の保存には非常に神経質で、いつも湿気はこないだろうなど、病院に行くたびに聞かされたものです。語学も好きな方で、死ぬる一、二年前頃は、たしかフランス語をやっていたはずだす。

文章もなかなかうまう、日記を見ましてもチヨイチヨイ論文的なことも書いていますが、そぞろありし日の面影が忍ばれます。最後に詩には一番趣味がかたむいて行ったようです。